



7月中旬から、南九十九島などで花を咲かせるカノコユリ
土の中で発根したカノコユリの種子
(中央の白い部分)

4.5.29 日本
西 絶滅危惧種「カノコユリ」

人工発根に成功

佐世保の九十九島
ヒジターセンター 2年後には開花

佐世保市鹿子前町の九十九島ヒジターセンターは、九十九島調査室が、九十九島などに自生し、環境省のレッドデータブックで絶滅危惧種に指定されている「カノコユリ」の人工発根に成功した。カノコユリの人工栽培は珍しく、同センターは「成功を足掛かりに、九十九島にカノコユリを増やす取り組みを進めたい」と話している。

カノコユリはユリ科の多年草。花卉に鹿のような赤い斑点があるのが特徴。九州、四国に自生している。同センターは、今年1月中旬に種子の人工的な発根実験に着手。しめりけたつぷりの土に約30、50個の種子(約5ミ)を入

れて約1カ月間、ヒーターで約30度の高温で温めた後、2月中旬から4月中旬まで約25度で保温。その後、冷蔵庫で4〜5度の低温状態にしたところ、発根を確認。今月中旬に再び常温に戻したところ、15個の種子で根が2センチほどに成長した。

約4センチの球根に育つまでには1年ほどかかり、2年後には開花する予定。順調に生育し花芽が確認されれば、環境省とも相談しながら、同センター近くにある遊歩道などに移植する予定。

14.5.30 長崎

絶滅危惧種「カノコユリ」

早期発根に成功 個体数増へ前進

九十九島ヒジターセンター



人為的な温度管理で根が出たカノコユリの種子
(九十九島ヒジターセンター提供)

佐世保市鹿子前町の九十九島ヒジターセンターは、絶滅危惧種に指定されているカノコユリの種子を人為的な温度管理で通常より約8カ月早く発根させることに成功。個体数の減少が進むカノコユリの保全に向け、成長サイクルを早めて数の増加を目指す。

カノコユリは白地に赤い斑点が特徴の多年草で、市内では南九十九島一帯など海岸から山地まで局所的に自生。2002年には同市花に指定された。ただ、人による採取やイノシシ被害などで個体数が年々減少。環境省などが絶滅危惧種に指定している。

通常、種子から根が出るまでに約1年、開花するまでには約2年程度かかる。九十九島の環境や生物調査を続けている同センターの九十九島調査室は今年、個体数増加に向けた本格的な取り組みに着手した。

発根を促すため人為的に寒暖を操作。1月中旬からパネルヒーターの上で約50個の種子を約25〜30度の温度で温め、4月下旬からは冷蔵庫で5度程度に冷やした結果、今月20日に発根を確認。約4カ月の短期間で発根に成功した。

現在は15個の種子から根が出ており、同室は「まずは一歩前進。次の段階として年内をめどに芽が出るよう取り組みを続けたい」としている。

(中山雄一)